

韓国薬学研修報告 ～博物館を見学して～

水野 靖久 薬学部6年 09A133

今回の韓国研修では、韓国の病院（西洋式の病院及び韓方病院）や薬局の見学を行ったり、韓方の歴史について学ぶことができる博物館の見学を行った。また、東國大学の学生や教師との交流を行った。

報告書は博物館で見学したこと及び学んだことを中心に記そうと思う。今回見学を行った博物館は許浚（ホジュン）博物館（図1）とソウル薬令市韓医薬博物館（図2）の2か所だ。

許浚博物館はソウル江西区にあり、許浚に所縁のある地に建てられている。

また、韓医薬博物館は韓国最大級の韓方市場である薬令市に存在する博物館で、最寄り駅の祭基洞駅構内から多くの生薬や昔の調剤道具などが展示してあった。

日本の医学に貢献した歴史上有名な人物と言えば、世界で初めて全身麻酔の手術を行った華岡青洲などが挙げられるが、韓国においては許浚が最も有名な人物であると言える。

許浚は1539年に武官の父と婚姻関係にない母との間に生まれた庶子であり、本来ならば宮廷医官の職に就くことはできない身分であった。しかし、患者に対する献身的な医療などが高く評価され、宮廷医官への試験を受けることが許された。許浚はその後、他の医官が投げ出すほどの病を患った王の治療などを行い、王を救ったことなどから正一品といわれる地位（役職の最高位）まで登りつめた。ところが、王が死ぬと許浚は罪を着せられ宮中を追い出されることになった。そこで、許浚は医学書の執筆に多くの時間を費やすようになったが、1年半後赦免され、内院に復帰することができた。しかし、その後も執筆活動を続け、500冊の医学書をまとめ上げた東医宝鑑（全25冊）を完成させた。

東医宝鑑（図3）は2009年にユネスコ世界記録遺産にも登録された。



図1. 許浚博物館



図2. 韓医薬博物館入口（地下にある）



図3. 東医宝鑑

許浚博物館では入るとまず許浚の生涯を細かく記した年表があり、近くに許浚が生まれた当時の江西区の街並

みを再現した模型が展示されていた。

進路に沿って進むと許浚が働いていた宮中内の医療施設の模型が展示してあった。施設には患者に食事を与える場所、薬を調合する場所、薬を与える場所、針治療を行う場所、寝る場所などがあり、それぞれ施設が分かれていた。

また、当時使用されていた調剤道具や生薬、人体の経穴や経路を表した絵や実際に許浚本人が書いたとされる東医宝鑑の原本も展示してあった。

展示以外にも当時使われていた調剤道具を実際を使用することが可能な体験スペースが設けられており、石臼や薬研（やげん）を使い生薬を細かくする作業を体験することができた。博物館の屋上は薬草園に繋がっており、特徴的なにおいのする生薬の葉を取って嗅がせてもらった。さらに博物館の近くには許浚が当時宮中を追い出された後に東医宝鑑を執筆していたと言われている洞窟もあり見学することができた。（図4）



図4. 東医宝鑑を執筆する許浚
(写真は実際の洞窟ではなく博物館内の模型)

韓医薬博物館では入口に不治己病治未病という言葉が刻まれていた。この言葉には病気になってから治そうとするのではなく、病気にならないように気を付けなければならぬという意味があり、予防に重点を置いた韓医学の思想を表している。現在日本の健康管理21で掲げられている1次予防に該当することが、韓国でははるか昔から言われていたようだ。

中に入ると朝鮮時代に存在した病院の模型が展示してあった。その病院は普濟院（図5）と呼ばれており、貧困や病気に悩まされる貧民の救済のために建てられた。そこでは患者が無償で医療を受けることができるだけでなく旅人の宿泊や祈祷行事なども行われていた。この病院も宮中内の医療施設と同じように患者に食事を与える場所、薬を調合する場所、薬を与える場所、針治療を行う場所、寝る場所などに分かれていた。



図5. 普濟院

隣には昔の人々が使用していた伝統的な医療器具が展示してあった。その中には薬草を採取したり大きさを整えるために使用した器具、薬を煮つめたり保存したりする器具が分類別に並べられていた。

また、許浚や李濟馬などが書き記した書物や絵があり、経穴と経路に関することや四象体質に関するなどが書き記されていた。

四象体質とは李濟馬が考えた患者の状態を表す指標で、太陽人、太陰人、小陽人、小陰人に分類される。これは現在の韓医学の治療指針の基になっている。さらにそれぞれ分類された人に適した生活習慣も紹介されていた。

韓医薬博物館内には500種類以上の生薬が植物性、動物性、鉱物性に分類されて展示されていた。他にも香りのよい生薬、珍しい生薬、毒のある生薬なども特設スペースに展示されていた。また、入浴剤や食事、お茶として用いる生薬の組み合わせなどが紹介されていた。

韓国は日本のようにはっきりとした四季があり、非常に多くの良質な生薬が採取可能である土地である。韓医学が発展してきた要因として、こういった背景も含まれているのではないかと感じた。

東國大学韓方病院では患者の個人体質を見極め、その人にあった治療が行われていた。体質の見極め方だが、見学に行く前は触診、視診、聴診などを行って判断していると思っていた。しかし、実際にはそれだけではなく、様々な測定機器を用いて体質を見極めていた。循環器障害のなりやすさを調べるための機器や内臓のバランスを測定するための機器（図6）などいくつか体験させて頂くことができた。

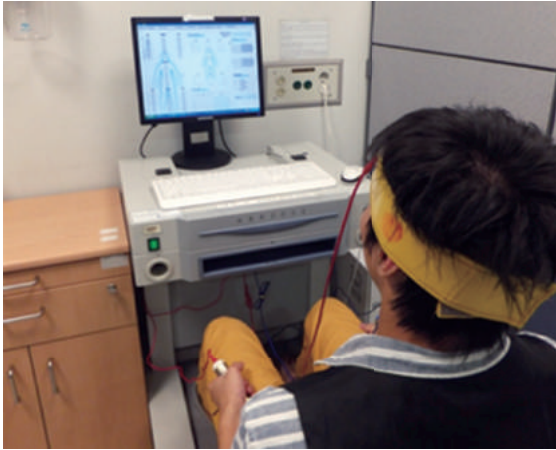


図 6. 内臓のバランスを調べるための機器

また、韓方病院ならではの治療施設もあった。その中で特に興味を持ったのが、発酵させた木の屑の中に浸かる風呂（図 7）である。この風呂は解毒や肥満改善に使われている。



図 7. 発酵した木屑の風呂

まとめ・感想

今回の韓国研修を通して、韓国では古くから一次予防を目指した医療が行われてきたことを学んだ。現在、先進国では高齢化が進行し、生活習慣病が増加傾向にある中、この一次予防の考え方はとても重要になってきている。来年には就職しているのので、薬剤師の一員として一次予防に貢献できるように努めていきたいと感じた。

現在の韓方医学では触診などだけでなく、多くの測定機器を用いて治療指針を決めていることが分かった。これにより、従来の四象体質からさらに細かく見ることもできるようになったようだ。実際に病院で検査をしていただいたが、思っていたより簡便ですぐに調べることができた。博物館などにも簡易的な四象体質を見る機器が

置かれており自分の体質を調べることができるようになっていた。

博物館で食事に使われる処方や入浴剤として使われていた処方などが見学できて良かった。機会があれば試してみたいと思う。

交流会では東國大学の学生や教師の方と、大学の制度や実習、医療に関して日本と韓国の共通点や異なる点などを話し合ったり、お互いの国の言語を教えあったりし、とても有意義な時間を過ごすことができた。

また、こちらが韓国から帰ってきてから数日後に、東國大学の学生が日本の病院や薬局、大学などを見学するために来日した。見学後に一緒に食事したり名古屋を案内したりと韓国の方ととても仲良くなれた。

最後に、来年も海外研修があったらですが、とてもいい経験ができると思うので、是非参加することをお勧めします。